

日韓比較を通した養育態度が強迫傾向に影響するプロセスの検討—パーソナリティの媒介効果の検討—

HP27-0046J アンミョンヒ

問題・目的

ドアやガスの元栓を閉めた後に、何度も確認するといった反復的な行為を行う人が少なくありません。日常生活に支障をもたらしているほどのことを強迫症と呼びます。強迫症は強迫行為と強迫観念からなります。強迫観念は、健常者にも、見られることを強迫傾向と呼びます。様々な研究から、強迫症と親の養育態度に関連があるとされました。

そこで、日韓比較を通した養育態度が強迫傾向に影響するプロセスを検討することにしました。

方法

韓国人留学生 83 名日本人大学生 83 名が調査に参加しました。養育態度の測定には EMBU-S 邦訳版を、パーソナリティの測定には TIPI-J を、強迫傾向の測定には MOCI 邦訳版をそれぞれ日本語版、韓国版を用いました。

結果・考察

養育態度と強迫傾向の関連に有意な差が見られました。また、養育態度とパーソナリティの関連に韓国人留学生のほうに強い相関が見られ、相関係数の差の結果も有意でありました。重回帰分析から、養育態度よりパーソナリティのほうが、強迫傾向と強い関連がありました。これらから、親の養育態度が子どもの強迫傾向につながる可能性が強く支持されました。また、親の権威主義的な養育態度が子どものパーソナリティに大きく影響を及ぼす可能性があると考えました。最後に、養育態度のみよりすでに形成されたパーソナリティや周囲の環境によるもののほうが、強迫傾向に影響を及ぼす可能性が高いことが示唆されました。